

平成19年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

軽度認知症における半側空間無視の有無と寝返り動作能力、転倒との関連

学位の種類: 修士 (理学療法学)

保健科学研究科 地域理学療法学 専攻 学修番号: 05854602

氏名: 高橋 洋行

(指導教員名: 池田 誠)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A 4 版) に収めること

背景: 半側空間無視 (以下: USN) は、脳損傷後遺症として広く知られているが、認知症においても USN が伴うことが報告されている。USN に関しての研究は、脳損傷後遺症を対象に、机上検査による検索パターンや誤反応分析等に関して数多くなされているが、日常生活動作との関連についての報告は数少ない。さらに、認知症を対象としたものは皆無である。また、BIT 行動性無視検査日本語版は、USN を検出する評価バッテリーとして使用されており、伝統的な評価を集めた通常検査、日常生活を想定して作成された行動検査からなる。認知症に対しても MMSE が 15 点以上であれば使用可能であるとの報告がある。

目的: 認知症で USN を伴った認知症 USN において、無視側と寝返り動作時間遅延側との関連を明らかにすること。認知症 USN の転倒との関連を明らかにすること。また、BIT 行動性無視検査日本語版行動検査で USN を検出しやすい下位検査項目の検討を行うこと。

方法: 通所リハビリテーションを利用している認知症高齢者 26 名、コントロール群として地域在住健康高齢者 13 名を対象とした。BIT を実施し USN の検出と無視側の判定を行った。無視側の判定には、Laterality Index を用いた。左右両側への寝返り動作時間の測定を行った。また、介護者、ケア担当者等に対する聞き取り調査、施設の事故報告書等をもとに転倒歴調査を行った。認知症群 (13 名)、認知症 USN 群 (13 名)、コントロール群 (13 名) の 3 群を設け統計学的検証を行った。

結果: 認知症 USN の無視側は有意に左側が多く、無視側への寝返り動作時間が有意に遅延した。また、従属変数を転倒、共変数を要介護度、年齢、USN、性別、認知症としたロジスティック回帰分析において USN のみが有意に転倒に関与した。BIT 行動性無視検査における行動検査の USN 検出率は、メニュー課題、音読課題、時計課題、硬貨課題、書字課題、トランプ課題で高く、電話課題、地図課題で低かった。

結論: 認知症 USN は空間性注意障害が左側で発症し、同側の左側へ寝返り動作時間が遅延することが明らかとなった。また、認知症高齢者において USN は、転倒の重大な因子となることが示唆された。BIT 行動検査は USN の高い検出率を得るために全項目を施行すべきである。